様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：２４６０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１７５６９

研究課題名（和文）小児がんの子どもの入院経過における家族機能と家族支援

研究課題名（英文）Family function and family support during the course of hospitalization of children with cancer

研究代表者
小代　仁美（Ojiro, Hitomi）

奈良県立医科大学・医学部・講師

研究者番号：８０５３１１３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：小児がんの子どもの初発時での入院経過における家族の状況は「診断から初回治療終了時期」「初回治療終了後から退院時期」の病期で異なる。「診断から初回治療終了時期」の親は、子どもの生命の危機・治療に対する不安・治療決定の重圧により、精神的不安定となる。さらに、親の不安がきょうだいの心理に影響していた。「初回治療終了後から退院時期」の親は、子どもの病状によるが、治療経過が理解でき、日常の生活の変化に慣れて、余裕が持てるようになる。一方で、親ときょうだいの心身の負担は続き、ストレスが高まる時期でもある。加えて経済的負担も大きい。このように、子どもの入院経過における家族の状況は異なることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
初めて小児がんと診断され、入院、治療を受ける子どもの付き添いをしている核家族を中心に、入院から退院までの時間的経過において家族が抱える問題は異なることを明らかにした。小児がんの子どもの家族が、子どもの入院経過のどの時期にどのような問題を抱えているのかを具体化したことで、家族が抱える問題を早期に把握でき、家族のかかえる問題に対して、適時にかかわることができる。看護師の家族への適時なかかわりにより、家族の健康の維持増進や家族のエンパワーメントを高めることに繋がる。そのことで、家族がこどもの闘病に向き合うことができ、子どもの闘病への助けとなる、という意義がある。

研究成果の概要（英文）：The status of family members during the course of hospitalization of children with cancer at the time of initial onset is (i) “from diagnosis-to-end-of-first-treatment period” and(ii)“from the-end-of-the-initial-treatment-to-the-time-of-discharge-from-hospital” period. Parents in (i) are mentally unstable due to the threat to their child's life, anxiety about the treatment, and the stress in making treatment decisions. Parental anxiety affected the psychology of the siblings. Depending on the child's medical condition, parents in the “after initial treatment and during discharge period” are able to understand the course of treatment, become accustomed to changes in their daily routines, and have more time to adjust. At the same time, it is a time of continued physical and mental strain and heightened stress for parents and siblings. In addition, there is a large economic burden. These results reveal that family situations differ during the course of a child’s hospitalization.

研究分野：小児看護学

キーワード：小児がん　初発　入院経過　付き添い　核家族

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

小児がんの子どもの入院治療により、子どもの両親、きょうだいという家族構成員が受ける生活の変化、心理的負担、役割変化、経済的負担は大きい。加えて我が国は、核家族で共働きの家庭が多いことから、両親は子どもの療養上の世話や残されたきょうだいの世話を優先して、仕事を転職、辞職、休職をしている（がんの子どもを守る会，2012）。小児がんの子どもの両親への心理的負担は大きく、心的外傷後ストレス反応（PTSR）のリスクがある（大園 他，2012）。母親は、心理的負担から子どもが入院して 1 か月の間に、医療者に対して求める支援が多い（梅田他，2005）。また、きょうだいは小児がんの子どもの入院１か月未満で登校拒否となっている（太田、1996）。両親は、発病した子どもの問題、心身の疲労、きょうだいの問題など、子どもの発病から１年以内は厳しい時期という報告もある（森、2007）。小児がんの子どもの入院から退院の時間経過で家族機能は変化し、抱える問題も異なる。家族がいつの時期にどのような困難を抱えているのか具体化が必要である。これまでは、主に母親、父親を対象としており医療者を対象とした調査は皆無である。家族を一つの集合体として捉え、子どもの入院の時間経過における家族機能の変化や問題の研究はない。

２．研究の目的

本研究は、きょうだいがいる核家族に焦点をあて、小児がんの子どもの入院の時間経過における家族が抱える問題が最小限となり、家族機能が健康維持増進でき、子どもと家族が共に闘病できることを目指す。よって本研究の目的は、小児がんの子どもが発病、入院した時期から退院までの時間経過における家族機能の変化と家族が抱える問題および家族支援の在り方を検討することである。子どもが小児がんに発病し、入院から退院までの時間経過における家族機能の変化の中で、家族が抱える問題を定期的にアセスメントし、適切にかかわることがより効果的に家族全体の健康を維持増進することが出来る。家族全体が健康となることで、小児がんの子どもと家族が一緒に闘病に向かえることが出来る。本研究により、小児がんの子どもの入院の時間経過に伴う家族機能の変化と家族が抱える問題を明らかにすることで、看護師が定期的に家族全体をアセスメントすることができると共に、適切な看護を導きす指標になると考える。

３．研究の方法

1）小児がんの子どもの入院から退院までの時間経過における家族機能と問題の文献検討

小児がんの子どもの発症、入院、治療開始から退院までの時間的経過における家族機能の変化と家族が抱える困難を明らかにする。

2）小児がんの子どもの入院から退院までの時間経過における家族支援の量的記述的調査

研究対象：全国の小児がんの子どもが入院している小児専門病院、大学病院に勤務し、研究協力への同意を得た看護師 500 名。

調査方法：研究協力の得られた医療機関に自記式質問紙を送付し、郵送法にて回収する。

調査内容は、子どもの入院から退院までの時間経過における家族機能と家族支援の実態。

3）小児がんの子どもの入院から退院までの時間経過における家族支援の量的調査の分析

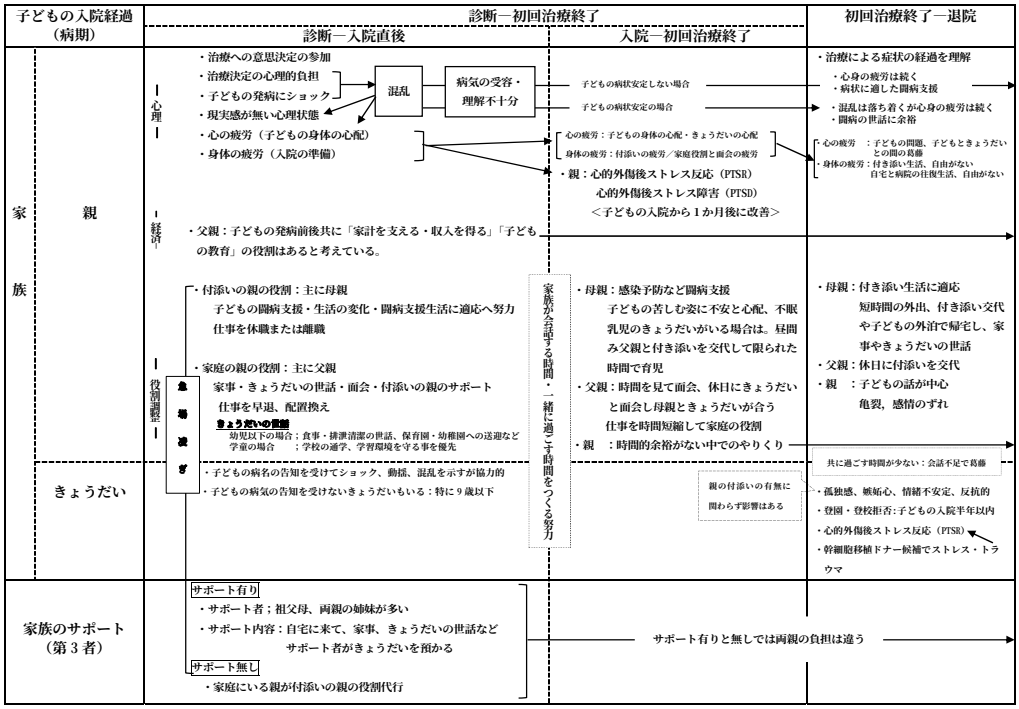
子どもの入院から退院までの時間経過における家族支援の実態の調査を分析する。

４．研究成果

1）小児がんの子どもの入院から退院までの時間経過における家族機能と問題の文献検討

子どもの初発時の入院経過における家族の状況は、「診断から初回治療終了時期」と「初回治療終了後から退院時期」の病期に分かれた。「診断から初回治療終了時期」の家族は、心理的混乱の状態でありながら、子どもの闘病の世話、子どもと共に入院生活への適応

する努力をしつつ、家族成員の役割や生活の調整を行っていた。「初回治療終了後から退院時期」の家族は、子どもの病状により左右されるが、治療経過が理解でき、生活に余裕が持てるようになる。入院の各病期における家族への看護を検討していく必要性が示唆された。



2）小児がんの子どもの入院から退院までの時間経過における家族の現状―看護師の視点―

両親は、入院～初回治療の時期では［子どもの生命危機の不安が強い］［治療の不安が強い］［治療決定の重圧が強い］［精神的不安定が強い］［経済的負担がある］［コミュニケーションは良好］［協力体制は良い］が高かった。また、付添いの親と家庭にいる親に関する質問では、［付き添いは母親が多い］［休職して付き添いをしている］が高い。付き添いの親の病院での生活は、［食事は取れている］［睡眠は取れている］［食事はコンビニ食が多い］［疲労がある］が高かった。一方、［家庭にいるのは父親］が多く、家事やきょうだいの世話や子どもの面会で時間を取られて［仕事に支障がある］［仕事の変更］［退職している］［疲労がある］が高かった。初回治療終了～退院の時期で結果に変化があった項目は、［子どもの生命危機の不安が強い］［治療の不安が強い］［治療決定の重圧が強い］［精神的不安定が強い］がやや高いが、入院から初回治療時期に比べて下がっていた。しかし、両親の［コミュニケーションは良好］［協力体制は良い］［経済的負担］、付き添いでの［付き添いは母親が多い］［休職して付き添いをしている］、［疲労がある］、家庭にいる親は父親が多く［疲労がある］が２つの時期ともに高かった。また、初回治療終了～退院の時期この時期特に高くなっているのは［両親は精神的に落ち着いている］であった。一方、［両親間の子どもの病状の認識のずれ］［両親の心的外傷後ストレス反応の出現］［両親の経済面への影響］［家庭にいる親（主に父親が多い）の仕事への影響］に関する質問は、２つの時期ともに低い値であった。

きょうだいの場合は、入院～初回治療の時期と初回治療終了～退院の時期共に、［心理的影響が大きい］が高い。一方、［不登園・不登校が表れている］［心的外傷後ストレス反応］は２つの時期ともに低かった。また、きょうだいに関する記述が多く「きょうだいの心理状況が不安定」「きょうだいまでケアができていない」「きょうだいは親に任せている」などの意見があった。

[引用文献]

森美智子(2007).小児がん患児の親の状況危機と援助に関する研究.小児がん看護,2,7-39.

がんの子どもを守る会(2012).小児がん患児家族の実態調査報告.

大園秀一,野口磨依子,西村美穂 他(2012).入院治療中の小児がん患者の両親における心理的負担と家族機能の関係.日本小児科学会雑誌,116（2）.310.

太田にわ(1996).母親付き添いによる小児の長期入院が家族に及ぼす影響.岡山大学医療技術短期大学紀要,7,35-39.

梅田英子,藤村まゆみ,山口佐代子 他(2005).小児がんで入院中の子どもを持つ両親の心理状態とコーピングの特徴.大阪大学看護学雑誌,11（1）.11-17.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 小代 仁美	４．巻 30
２．論文標題 小児がんの子どもの初発時での入院経過における家族の状況に関する文献的研究	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本小児看護学会誌	６．最初と最後の頁 89～97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20625/jschn.30_89	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Hitomi Ojiro, Yuka Hayakawa	４．巻 70(1,2,3)
２．論文標題 Relationship Between Clinical Competence of Undergraduate Nursing Students and Their Understanding of Children	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Journal of Nara Medical Association	６．最初と最後の頁 25-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小代仁美　、　早川友香	４．巻 31
２．論文標題 小児がんの子どもの入院における闘病仲間とのかかわりに対する親の思い	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本小児看護学会誌	６．最初と最後の頁 45～52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 小代仁美
２．発表標題 小児がんの子どもの入院経過における家族の現状 －看護師の視点－
３．学会等名 日本小児看護学会第30回学術集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 小代仁美
２．発表標題 小児がんの子どもの入院経過における家族の現状 －看護師の視点－
３．学会等名 日本小児看護学会第30回学術集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 小代仁美
２．発表標題 小児がんの子どもの入院経過における家族機能に関する文献的研究
３．学会等名 日本小児看護学会第28回学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hitomi Ojiro　Yuka Hayakawa
２．発表標題 Parents’ Concerns and Emotions About the Status of Peer Support- Giving Among Children Receiving Treatment for Pediatric Cancers
３．学会等名 50th Congress of The International Society of Paediatric Oncology（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関